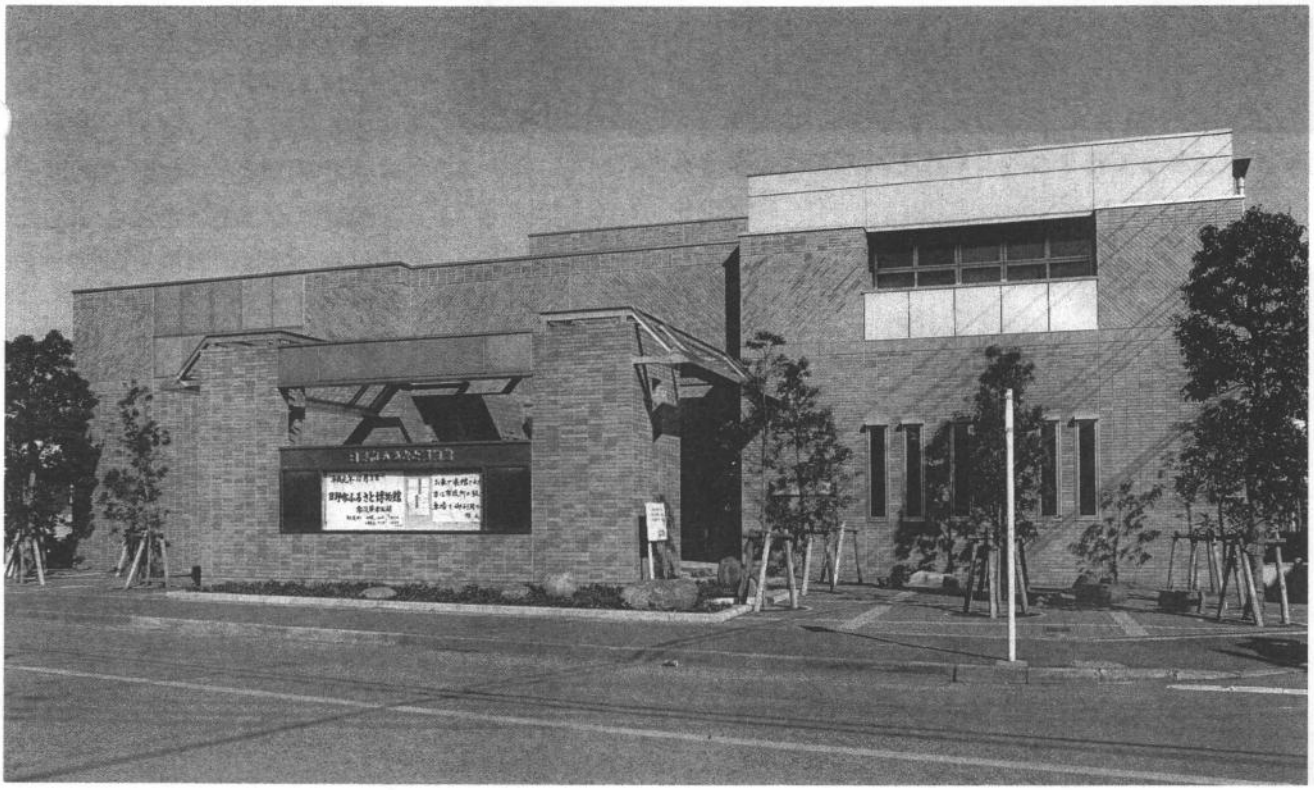
東京都三多摩公立博物館協議会報

ミュージアム 多摩

No. 11

発行：平成２年３月15日

日野市ふるさと博物館の公開にあたって



『緑と文化の市民都市』を標榜する日野市では、市民のふるさと日野に対する理解と関心・知識を深め、郷土への親近感・日野市民としてのアイデンティティの醸成、市民文化の一層の発展に寄与する郷土資料館として、日野市ふるさと博物館を平成元年11月３日に公開致しました。

当館では、『ふるさと日野の川と文化』を統一展示テーマとしています。日野市は多摩川の中流域に位置し、多摩丘陵と日野台地、河岸段丘、そして沖積低地に続く多摩川と浅川という地形から成り立ち、市域は変化に富んでいます。この様な地形を時の流れの中で形作ってきたのが、多摩川とその支流の浅川です。ふるさと博物館では、二つの川を中心に、流域で暮しを立ててきた人々が、この地でどのように川と関わり合いながら現在にまで至ってきたのかを紹介し、今後、私達はどのように関わり合う必要があるのかを考えて戴けるように、各コーナー毎に関連する小テーマを設定し、全10コーナーによる様々な切口からの展示解説を行っています。

小・中学生に親しみ易い展示を心掛け、縄文土器から中国陶磁器に至るまでの土器片・陶磁器片等を直に触れ、肌触りの違いを感じとっていただくコーナー（写真１）の他、日野の歴史や自然、史跡等が順を追って楽しく学習・観賞できるようにＡＶ機器を多用（写真２）しています。

さらに理解を促す為に、当博物館イメージキャラクター・カワセミの「ふるさと博士」による質問を各コーナーに設け、同一コーナーの解説、図版、映

写真１（さわってみよう　それぞれの時代のやきものに）

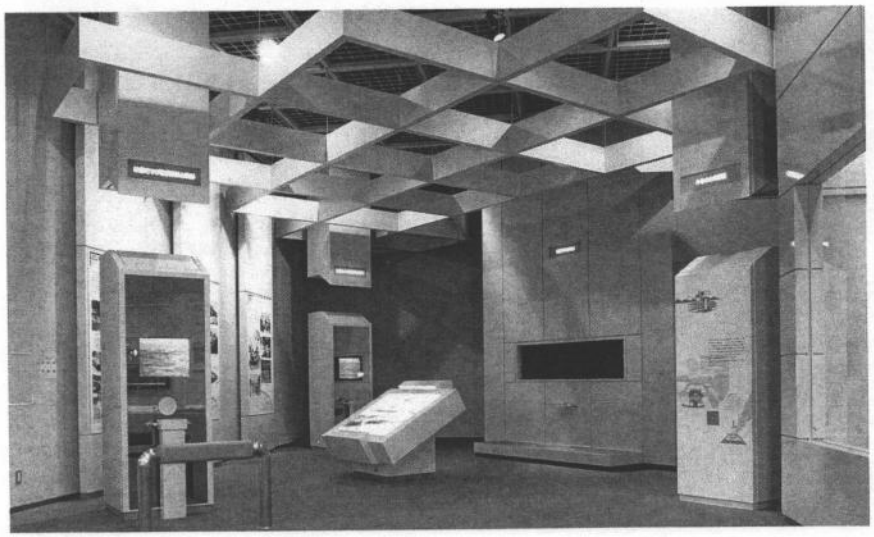


写真２（映像でつづる多摩川と日野）

像等を見聞きすることによって、その答えを得ることができるようになっていることも、常設展示の特徴の一つとなっています。

この他、当館では展示室への導線上となる外構部、中庭、エントランスホールに展示領域を広げ、地域に親しまれる博物館のイメージを高めています。

外構部…多摩川が上流から運んできた石を、一部カットして磨き上げ（ネームプレート付）、坐れるようになっています。博物館周辺の方々の語らいの場であったり、子供達の遊び場にもなるなど、思惑どおりの憩いの場を提供することができたようです。

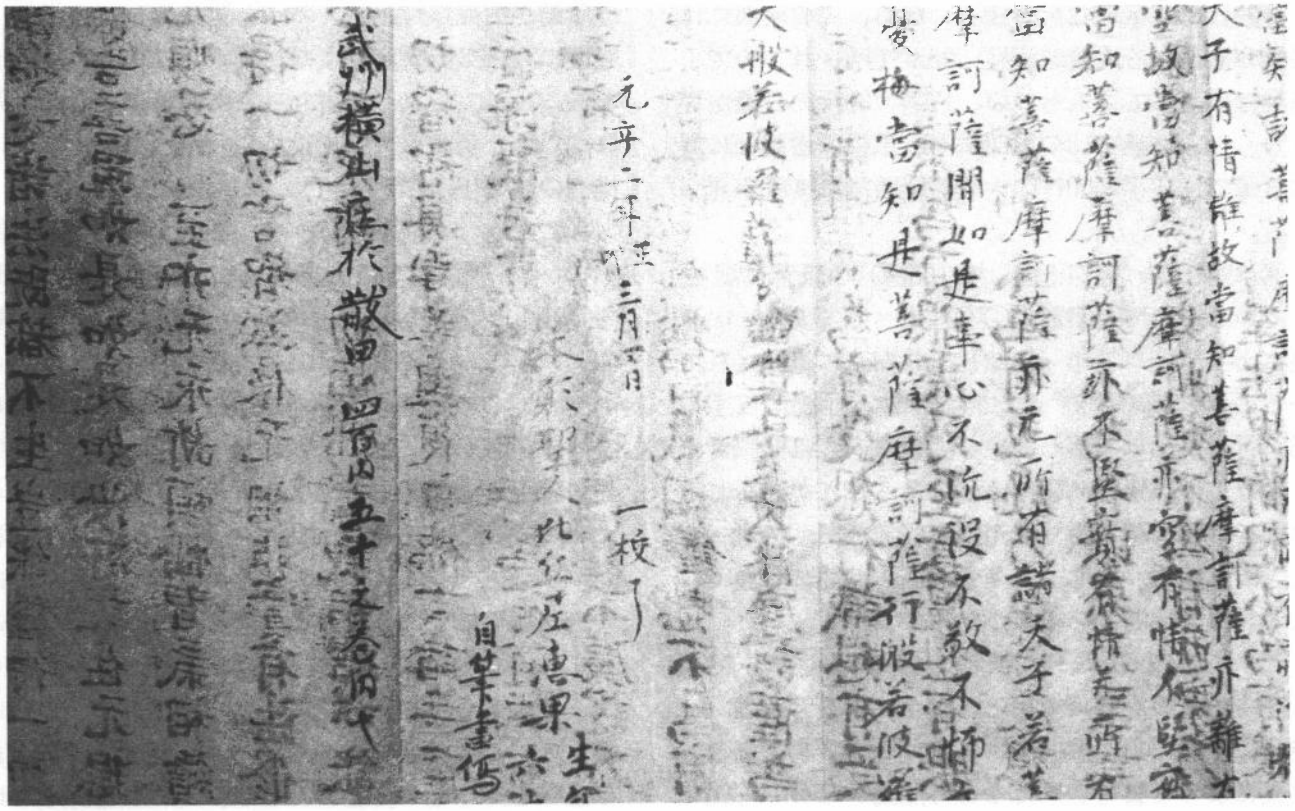
中庭…正面入口に向って左側の建物外壁面には日野市と周辺他市との標高を、６種類の色の異なる花崗岩で表現した地形レリーフを配し、その向側には、「江戸名所図会」より採った多摩川での鮎漁の様子と、甲州街道は日野の渡船場を描いた陶板画を相対して配し、訪れる人々の目を楽しませています。

エントランスホール…「ふるさと日野」の自然をバードカービングとフィッシュカービングを配したそれぞれのイメージレリーフで紹介し、土・日曜・祝日には双眼鏡を用いた「博物館でバードウォッチング！」の解説を行いながら、自然の貴さを呼びかけています。

〈ご案内〉■〒191　日野市神明４丁目16番地の１
■☎　0425-83-5100
■開館時間　午前９時～午後５時（入館は４時半まで）
■休 館 日　毎週月曜日（祝日の場合はその翌日）
毎月の末日（休館日に当たる時はその翌日）
12月28日から１月４日まで
■観 覧 料　大人100円、小中高生50円
■交通　ＪＲ中央線日野駅より徒歩12分
京王バス高幡不動駅●平山城址公園駅系統ふるさと博物館前下車
〃　〃　●ＪＲ日野駅系統実践女子短大前下車徒歩１分
※　お車は市役所駐車場を御利用下さい。徒歩２分

寿福寺所蔵の大般若経と八王子に関する中世資料

八王子市郷土資料館
学芸員　細谷　勘資



寿福寺は現川崎市多摩区菅に所在する臨済宗建長寺派の古刹である。同寺に大般若経 600巻が蔵せられていることは古くから知られており、文人墨客が度々訪れ、その記録を残している。この大般若経は、治承三年（1179）に書写されて以来、元禄十三年（1700）までの間に、少なくとも８回の補修・増補がなされているが、現在の形態は、その後の補修によるもので、この際、同規格の装幀がほどこされ、経櫃・経函が作られるなどしている。

大般若経は、その奥書に深大寺（現調布市）の僧長弁の名が見られる他、智感の版行したものもあり、大変貴重な中世史料といえるが、概要については別の機会に譲るとして、小稿では、この度の調査で見つかった八王子に関する中世史料について紹介することにしたいと思う。

①　正中二年乙丑正月廿三日、願主聖恵果書写了
「同二月五日彼岸第二日一交了　頼祐」
（異筆）

②　正中二年乙丑正月廿九日、願主聖恵果書写了
「同二月五日彼岸第二日一交了　良□」
（異筆）

③　元享二年壬戌三月四日　　一校了
本願聖人比丘尼恵果生年六十
自筆書写了（花押）
武州横山庄於散田　四百内五十之巻内也、

まず、①は巻 276（竪24.5糎、横 9.6糎）の紙背に書写されている大般若経巻 111の奥書である。恵果が正中二年（1325）正月廿三日に書写したもので、同二月五日に頼祐が一交したことが知られる。巻 111 の後部には、同一筆跡で巻 114が接貼されていて、いずれも断簡である。巻 111は前半が、巻 114は後半が欠落し、字数・行数は、前者が17字× 120

行、後者が17字×396 行となっている。

次いで②は、巻 527（竪24.5糎、横 9.8糎）の紙背に書かれている大般若経巻 113の奥書で、文字の磨滅などにより判読しにくい箇所が若干ある。①の史料と同様に、恵果が書写しており、その年紀は正中二年正月廿九日で、同年二月五日に「良□」が一交している。巻 113の前半は欠落しているが、字数・行数は、17字×42行が残る。なお、この前部には巌乗の筆による大般若経巻 526が接貼されていて、前半は欠落しているものの、17字×36行の分量が存在し、さらに巻 113の後部にも、恵果・巌乗とは異なる筆で、17字×50行の大般若経断簡の接続が見られる。

③は巻 528（竪24.5糎、横 9.3糎）の紙背に記されているもので、字数も①②に比べて多少多い。恵果によって元享二年（1322）三月四日に書写されているのは大般若経巻 442で、字数・行数は17字×462 行、前半は欠落している。奥書内容は興味深いもので、尼恵果は60歳の高齢であることが知られる他、この書写事業を「武州横山庄於散田」で行ったことがわかる。なお、この巻 442の前部には異筆による大般若経断簡の接続が見られる。

これら①②③は、いずれも界線はなく、料紙も同質の楮紙を用いている。また、大般若経巻 111、巻 113、巻 114、巻 442はともに同一筆跡であり、恵果によって書写されたことは間違いない。写経の行われた「武州横山庄於散田」は、現在の八王子市散田に比定することができ、これにより当時、散田は横山庄と呼ばれる荘園に含まれていたことが確かめられる。さらに恵果の周辺には、頼祐、「良□」などがおり、この写経事業に参加していたことが知られる。こうした事業が行われた背景については明らかではないが、大般若経を書写・奉納することで、動揺する当時の東国世界の安穏を願う宗教的動機が大きな契機となっていたことは事実であろう。

八王子の周辺では14世紀から15世紀にかけて、大般若経の書写が盛んで、例えば、五日市町の大悲願寺に伝わる『過去帳』によれば、建武三年（1336）に円福寺（現八王子市上川町）の住僧であった良助が大般若経一部 600巻を再修書写し、同四年二月廿三日に同経供養している。また、同寺には現在大般若経が蔵せられているが、これは川口兵庫助幸季の発願により、鳥栖寺に寄進されたものである。筆写にあたったのは、明鑁・良鑁などで、応永三十年（1423）から正長三年（永享二年＝1430）にかけて、宝生寺観音堂（現八王子市西寺方町）で行われている。さらに日野市の金剛寺（高幡不動）をはじめ先の円福寺や長楽寺（現八王子市川口町）などにおいて、頼縁や儀海を中心にその弟子能信、能秀、頼済、即円、宥舜、宥恵、実快、良慶、良賢、祐信らの写経活動が活発に行われており、新義真言宗の浸透・発展に大きな影響を与えた。恵果、頼祐、「良□」もあるいは、こうした者たちと関係があったかもしれないが、現時点で私達に与えられた史料のみでは推測の域を出ない。

さて、巻 276、巻 527、巻 528は、料紙の継ぎ接ぎ方から、横山庄散田で書写された大般若経の料紙を活用して巌乗が筆写したものと考えてよい。巻 527 の裏には、巌乗の手になる巻 526の断簡が見られるが、これは巌乗が巻 526が欠落していないのに誤って書写してしまい、料紙の再利用ということで先の恵果の大般若経と継ぎ合わせて、その裏にあらためて巻 527を書写したためであろう。さらに巻 527 の筆跡と巻 276のそれとを比較すると明らかに同筆であるので、全て巌乗の手になるものということになる。したがって横山庄散田で書写されたものが、どのような経緯を経て寿福寺に伝わったのかに関して、この巌乗の経歴や動向が、その解明に大きな意味を持つものと思われるが、これ以上詳らかにし得ない。しかし、むしろこうした料紙の伝来を通して、武蔵国内における僧侶をはじめとする人的物的交流が盛んであった当時の状況を垣間見ることができる。多摩川流域の文化圏ともいうべき地域内での多方面にわたる交流関係を押さえていく中でこの史料の性格は理解されなくてはならない。

その為には、各地区の諸史料を共有財産として体系的に網羅し、把握していくことが必要であり、史料が後世に伝えられていく歴史的な要因や性格を検討していきながら、これをふまえた調査の方法もあらためて考えていくことが、これからの課題として求められるべきであろう。

最後に、大般若経の調査にあたり寿福寺御住職・野々村玄龍氏には大変お世話になった。氏の御高配に深謝申し上げます。また、土井義夫氏には調査に御協力いただき、御教示を賜ったことを記して謝意を表します。

〔平成元年度展示活動報告〕

館　　名	展示会名	期　　間	内　　容
町立五日市町郷土館	五日市町の文化財展	2．2．15 ～2．3．12	普段あまり見ることの出来ない文化財と、神社・寺院の建築などについて展示。
青梅市郷土博物館	青梅の学校展	元．11．3 ～2．4．29	江戸時代から明治、大正、昭和にかけての学校の歴史を市内の学校に残る由緒あるゆかりの品々とともに展示、解説を加えて紹介する。
	青梅の乗物・駕籠展	2．3．6 ～2．7．1	江戸時代、身分により乗輿の制が定められていた乗物・駕籠を市内に残る遺物をもとに展示解説する。
奥多摩郷土資料館	収蔵品展（2階）	元．4．1 ～2．3．31 2．1．11 ～2．1．31	奥多摩の民俗をメーンテーマに、水没した小河内の山村生活用具（国指定）を展示・紹介する。 小展示替：年中行事としての小正月飾りの門棒、まゆ玉飾り（小河内小児童による作品）を展示。
	小河内の郷土芸能（1階特別展）	元年度（年間）	小河内地区に伝承されている、郷土芸能の鹿島踊り、車人形、獅子舞、花神楽を展示・紹介する。
清瀬市郷土博物館	縄文時代の生活を探る	元．11．1 ～2．10．31	－歴史展示室－縄文時代の生活を道具の製作や使用方法などから探る。
	人の一生	2．2．1～ 3．1．31	－民俗展示室－清瀬の、人の一生に関わる儀礼を民具・写真等で視覚化し展示する。
	特別展「水の詩・花の詩－井上員男紙版画の世界－」	元．4．29 ～5．14	－ギャラリー－独自の紙版画の世界を確立し、国際的に活躍中の井上員男氏の初期作品から最近作までを展示。
	特別展「日本の洋画に描かれた自然」	元．9．23 ～10．10	－ギャラリー－風景画を中心に近現代の代表的な日本洋画家29人の作品を展示し日本洋画の流れを辿る。
	企画展・現代彫刻の新世代展	元．6．3 ～6．18	－ギャラリー－見る機会の少ない現代彫刻を身近なものとして鑑賞できるよう市内外の彫刻家6人の作品を展示。
	企画展・清瀬美術家展	元．11．11 ～11．26	－ギャラリー－清瀬市内在住の美術家24人による彫刻・絵画を展示。
	年中行事	8回	－伝承スタジオ－清瀬で昔から行われてきた粟穂・稗穂や棒打などの年中行事や農家の仕事を実演、また参加者にも体験してもらう。
	老人の知恵に学ぶ－食編－	10回	－伝承スタジオ－地元の人や各地出身の市民に郷土の伝統料理を紹介してもらい、住民相互の理解と交流を深める。
	老人の知恵に学ぶ－衣・住編－		－伝承スタジオ－藁草履作りやしめ縄作りを体験的に学ぶ。他に和裁教室、機織り教室、天然染め入門を設置。また夏休みに市内の小学3年生を対象に宿泊体験学習を実施。
	映画会「さまざまな暮らしシリーズ」	元年4月～2年3月　月1回	－映像展示室－世界・日本各地の生活様式の諸相を見ることのできる映画を上映。
立川市歴史民俗資料館	特別展「はかる」	2，3月末 ～4月初	市内で使用された計測具の展示。度量衡に関するもののほか、“時間をはかる”ものとしての時計やカレンダーなども展示する。
	ミニ展示会「立川の野草」	元．8．1 ～8．13	市内でもあまり見かけなくなった野草を、カラー写真で紹介。
	「立川の今と昔」	元．8．15 ～9．3	立川駅やその周辺の風景について、今昔の写真を対比しながら展示。
	マユダマ展示	2．1．14 ～1．25	年中行事のうち、小正月に行われるマユダマ行事を、地域の方の協力を得て玄関ホールに展示。
調布市郷土博物館	特別展「関野準一郎版画の世界」	元．4．11 ～5．14	現代版画界を代表する関野準一郎の版画・肉筆画等を展示。
	調布の歴史	元．5．26 ～8．31	調布の通史について紹介。

東京都高尾自然科学博物館	第95回・自然観察会	元. 4. 16	高尾山周辺のスミレの観察・東高尾山陵～初沢
	第96回・自然観察会	元. 5. 14	鳥たちのさえずりを聞こう！・高尾山自然研究路
	第97回・自然観察会	元. 6. 11	カエルを見に行こう！・五日市町秋川～広徳寺
	第34回・自然講座	元. 7. 16	高い山に暮らす植物・博物館講堂
	第35回・自然講座	元. 8. 13	ハチの仲間の話・博物館講堂
	第98回・自然観察会	元. 9. 17	シダ植物に親しもう！・高尾山自然研究路
	第99回・自然観察会	元. 10. 15	たねの散り方の観察・東高尾山陵～初沢
	第36回・自然講座	元. 11. 19	高尾山の森林と植物の話・博物館講堂
	季節展「高尾山の植物」	元. 10. 10～11. 26	高尾山植物調査による3年間の成果に基づいて、植物標本と写真を展示・解説、季節展示室。
	第37回・自然講座	元. 12. 17	多摩の地学（地質・哺乳動物化石）・博物館講堂
	第38回・自然講座	2. 1. 21	多摩の動物⑦（タヌキ・ハクビシン）・博物館講堂
	第39回・自然講座	2. 2. 18	多摩の植物⑦（谷中の植物ほか）・博物館講堂
	第100回・自然観察会	2. 3. 25	100回記念・早春の高尾の自然・高尾山自然研究路
東京農工大学工学部附属繊維博物館	サークル寄贈作品展	元. 4. 1～5. 4	当博物館サークルから寄贈してもらった作品の展示
	ぬう・ミシン今昔展	元. 5. 13～6. 15	八王子市在住・関谷氏のミシンのコレクション
	せんい切手展	元. 6. 20～9. 30	当館コレクション、せんい製造・記念等の切手
	特別展　麻の世界～越後縮布から現代布まで～	元. 5. 24～28	特別展せんいシリーズの第3弾。人類の歴史と共に歩んだ麻の歴史から、現代の麻事情まで。講演会・実演等あり。
	ﾃｷｽﾀｲﾙﾃﾞｻﾞｲﾝ展Ⅳ	10.1～10.3	デザイン学生の手織見本
	昭和初期のマッチ商標展	11.1～12.13	当館コレクション。昭和初期の広告マッチラベルの展示
	結び文化展～衣食住を中心にして～	11.8～12	結び技法の歴史、衣食住にまつわる結びを展示した。その他農業・スポーツ・工芸の結び等、結びに関するもの全て復元してみた。
	縫う道具展	12.13～2.15	家庭主婦が持っている裁縫用具を集めてみたもの。
	わら細工展	2.16～3.末	当館コレクション。今まで使われたわら製品。
八王子市郷土資料館	特別展「八王子宿のうつりかわり」	元. 7. 25～8. 27	八王子の市街地の歴史を中心に、江戸時代の地図や絵を使ってわかりやすく展示し、市民に八王子の歴史の概略を理解してもらう機会とする。
	企画展「中世の多摩地方」	10.29～12.3	大石氏の関連資料を総合的に調査、整理し、その果たした役割について考え、併せて多摩地方の中世史について見直す機会とする。
羽村町郷土博物館	企画展「さまざまな民具-食生活用具-」	元. 4. 29～6. 30	今までに寄贈していただいた民具のうち食生活用具を中心に展示。
	講座「はむら自然観察会」	元. 5. 21 7. 15 10. 14 12. 3 2. 2. 25	羽村町内に生息する野鳥や植物などを観察する。一度は町外の自然と比較するため、御岳方面へも足をのばしたが、主として多摩川の川沿いや草花丘陵を散策し、初心者向けの観察会として年間を通して5回行った。
	体験学習「蚕の飼育」	元. 6. 28～7. 16	養蚕のさかんだった羽村で養蚕業がどのように行われてきたのかを感じとってもらうために、三令の蚕から繭になるまでを飼育展示した。
	講座「町内史跡めぐり」	元. 10. 8	町内に残された数々の史跡の中で、小作方面のものを訪ね歩いた。
	特別展「漆－うつわ小史－」	元. 10. 14～11. 26	縄文期より始まる人と漆との付き合いを探るため時代を追った漆のうつわや、漆の採集用具、漆器のできるまでの工程を展示。また町内の身近な例として膳椀倉を取り上げ、町内在住の漆芸家の方に漆塗り、絵付けの実演をしていただいた。
	体験学習「まゆ玉飾り」	2. 1. 7（展示は1月14日まで）	羽村で昔から年中行事の一つとして行われてきた「まゆ玉飾り」を参加者と共に作り、講師の方に「まゆ玉飾りとどんど焼き」についてお話をしてい

			ただいた。作った「まゆ玉飾り」は常設展示室の体験コーナーと旧下田家住宅内に展示した。
東村山市立郷土館	企画展「写真展－水没した小河内村－」 常設展示 「東村山の歴史と民俗」		ダムの湖底に水没した村、小河内の写真を借用し展示。 限られたスペースであるが、「東村山の歴史と民俗をタイトルに常設展示を行っている。 １階は考古資料を中心に、先土器・縄文・奈良・平安時代の石器・土器類、中世の板碑を展示。 ２階は民俗資料を中心に、製茶・養蚕・機織などの生業、種々の生活用具、また江戸末以降の教科書類の展示を行っている。
桧原村郷土資料館	1.桧原村の昆虫展 養蚕の飼い方の展示	元. 8. 5～18	桧原村に生育する昆虫を会場に集めて展示した。この村は江戸時代より養蚕が盛んであったのでそれに使用された用具も多く残されているので、養蚕の飼い方からまゆになるまでを展示した。
	桧原村の昆虫教室・折紙教室	8. 6, 13	スライド・パネル等により昆虫の生態などを紹介し、これに合せて折紙教室を開き、蝶、カブト虫、くわがたなどの折紙を行った。
	秋川に生息する魚たちの展示	8. 5～18	秋川の上流に住む魚を大きな水槽に入れ、木立の間を音を立てて流れる上流の川に住む魚達をゆっくり観察してもらった。
	2.獅子舞の花笠の展示	10. 9 ～11.5	桧原村の獅子舞は都の文化財にも指定され、その舞は美しい。花笠は自治会総出で作り地域の特性が生かされ同じものは二つとない手作りのよさは自治会自慢の作品である。（村には獅子舞７ヶ所ある）
府中市郷土の森	特別展「府中の民話絵本原画展」	元. 3. 19 ～4. 9	絵本「府中むかしばなし」全３冊の刊行を記念して、画家二俣英五郎氏の絵本作品の原画を展示紹介する。（前年度より継続）
	企画展「文字から探る古代の府中」	6. 6 ～7. 2	市内の遺跡から出土した漆紙文書は、暦の一部と分かって話題を呼んだ。こうした文字関係出土資料から、古代の府中を探る展示とした。
	企画展「宇宙開発展～日本のスペースシャトル」	7. 9 ～9. 3	日本の宇宙開発事業の歴史と現状をテーマに、展示とプラネタリウムで同時開催して学習の相乗効果を図った。人工衛星やロケット模型のほか、世界の珍しい宇宙切手などにより展示構成する。
	「刀剣展」	11. 2 ～11.5	市民芸術文化祭参加展示会。刀剣武具等を展示。
	特別展　ＮＨＫ海のシルクロード「古代シリア文明展」	11.12～12.17	市制35周年・郷土の森開設３周年記念として、ＮＨＫサービスセンターと共催する。シリア各地の博物館から国宝級の考古遺物・美術品など世界初公開資料を含め、展示構成する。
	企画展「梅あらかると展パートⅢ」	2. 2. 4 ～3. 4	第３回郷土の森梅まつりの一環として開催する定期展。「梅と健康食品」をテーマとして、分析データに基づいて一体ウメのどのような部分が体に良いのかを考えてみる。
	特別展「氷河期の狩人」	3. 11 ～4.15	考古資料のみでなく動物化石、植物化石から旧石器時代をイメージする。あわせて、市内の武蔵台遺跡など野川周辺の旧石器を展示。
福生市郷土資料室	ボタニカルアート展 絵でみる福生市の野草２・春告花達の宴	元. 6. 1 ～6. 29	福生市内で春に開花する野草をボタニカルアートで紹介。また参考出展として木の花も展示した。
	芭蕉と奥の細道	10. 14 ～11. 29	福生市郷土資料室の収蔵する主要な資料の一つ森田文庫旧蔵資料の中から松尾芭蕉と『奥の細道』に関わる資料を展示した。
	第２回ネイチャーフォト講座・成果展	12. 1 ～12. 28	同年８月～10月に行われたネイチャーフォト講座の成果を発表するため受講者30余名の作品を展示。
	ボタニカルアート展 絵でみる福生市の野	2. 1. 5 ～1. 29	福生市市内で秋から初冬にかけて開花する野草をボタニカルアートで紹介。合わせて同時期に見られ

	草３・秋色の野想曲		る木の花や実なども参考展示した。
	特別展“えがかれた江戸時代の村－牛浜水出図と福生村、熊川村絵図－”	2．2．1 ～3．30	江戸時代の村の様相を視覚的にとらえ理解していただくことを目的として、幕末期に村内の生活ぶりを描いた「牛浜出水図」や福生村、熊川村の村絵図などを展示。図録を出版。
町田市立博物館	町田の遺跡展	元．5．2 ～6．25	市内で発掘された縄文時代から古墳時代までの出土品を中心に展示し町田の歴史の一端を紹介。
	同時展示　アール・ヌーヴォー、アールデコのガラス		19世紀末から20世紀前半にかけてヨーロッパに花開いた新芸術のガラスを展示。
	町田の仏画展	7．4～ 8．6	昭和62年度63年度に当館で行った「町田市絵画調査」の成果を広く一般に公開し、この地方の仏教文化の一端を紹介。
	川田順造コレクションを中心に籠と瓢箪　～アフリカの民具	8.15～ 9.24	文化人類学者として知られる川田順造氏収集のアフリカの籠と瓢箪製用具を中心に紹介。
	中国のガラス －18世紀～20世紀－	10．3～11.12	18世紀（清朝）から20世紀にかけて作られた中国のガラスを展示。
	武蔵の金銅仏	11.21～12.17	金銅仏は銅で作られた仏像に鍍金（金メッキ）を施して仕上げたもので、その美しい輝きは古より人々の心を魅了した。本展では、東京、埼玉、神奈川を中心に展示。
	民具と生活 －同時展示－町田の自然・樹木の世界	2．1．5 ～2．4	近郊住宅都市として発展する町田市域も昭和30年代までは農村的生活と景観を色濃く残す地であった。本展では当時の生活の様子を、衣・食・住及び農業に使った民具から紹介する。又同時展示とし町田の自然から樹木を取り上げ、写真パネルで紹介。
	民具と生活 －同時展示－多摩の民具・くるり棒	2．6～3.18	「民具と生活」は、前期からの展示を継続する。同時展示とし、麦の脱粒などに多摩域で広く使われていた農具、くるり棒の様々を紹介。
瑞穂町郷土資料館	瑞穂のむかしのくらし	前年度～ 元．10．31	町のむかしのくらしをテーマに、郷土資料館に保管している民具を展示。
	瑞穂の年中行事	元．11．1 ～2．10．31	町の年中行事をテーマとする、元年度町総合文化祭への参加展示。さらに継続して常時展示をしている。お正月行事にはじまり、各月のすでに廃止された古い風習から、現在も行われているものを展示。
武蔵村山市立歴史民俗資料館	常設展示「武蔵村山　その自然、その歴史、その民俗」	元．4．1 ～3．31	武蔵村山市の自然、歴史、民俗について、その概要を展示し、来館者のより深い学習の契機となるよう努めている。
	特別展示「食の民俗」	10．8～12.10	昭和30年代以降の生活様式の大きな変化により、食制や食生活の道具も大きく様変りしている。そこで、昭和の初め頃の食生活の復元をとおして、かつては身近にあった生活文化財について理解を深め、文化財保護意識の高揚に努めた。
	収蔵品展示「昆虫・押し花」	8．6～ 9.10	館収蔵の自然資料のうち、押し花と昆虫標本を展示、公開し、自然保護の意識高揚に努めた。
	作品展示「親子でつくった縄文土器」	2．1．14 ～2．11	体験教室「親子縄文土器づくり」の様子と製作した縄文土器を展示、公開し、資料館の教育普及活動の紹介を図った。

発行：東京都三多摩公立博物館協議会
〒194 町田市本町田3562
町田市立博物館内
☎0427-26-1531

編集委員：浜中　茂（青梅市）　小野崎満（調布市）
栗原　仁（瑞穂町）　金丸義人（奥多摩町）

印刷：イコープリント